

哲學研究

第百八十七號

第十六卷
第十號

「一般」と云ふ言葉の意味について

高坂正顯

「一般」überhauptと云ふ言葉は如何なる意味を有するのであらうか。一般と云ふ言葉が我々に示す世界は如何なる世界であるのであらうか。問題をカントの純粹理性批判に限つてみても、それは決して單なる言葉の解釋には盡きないであらう。その事は人が經驗一般 die Erfahrung überhaupt 對象一般 der Gegenstand überhaupt 物一般 das Ding überhaupt と云ふ如き言葉の意味を思ひ、更に意識一般 das Bewusstsein überhaupt と云ふ言葉を思ひ合はず時、自ら肯かれる事であらう。カント解釋の上に於て極めて重要な役割を演じながら、その用語例の僅か二三に止まる爲に、又殆んど何等の説明なくして用ひられてゐるがために、種々なる立場の相違よりして隨意の解釋を與へ

られ來つた意識一般なる言葉をば、物一般、對象一般、經驗一般と云ふ如き結合に於て用ひられた「一般」と云ふ言葉の解釋よりして明にせんとする事は、望みなき試みに過ぎないであらうか。もとより意識一般の深き意味は、かゝる言葉の解釋によつて盡され得べしとも思はれない。しかしながら我々はかゝる解釋を通じて、比較的信憑すべき通路をば、意識一般に對して獲得し得ないであらうか。ともあれかゝる試みも一應は營まるべきではなからうか。

まづ私達の注意を惹く一つの事は「一般」überhauptと云ふ言葉が凡らくは日常的地盤に於て用ひられる言葉であつた事である。元來それはüberとHauptとの結合から生じたと云はれる。即ち「頭上」に或は「上方」を意味したのである。従つてそれは「人々の頭を越えて」über das Haupt, beziehungsweise, die Häupter hinの意味から更に「頭ならしに」を意味し、かくて多くの對象を總括的に指示する言葉となつたのである。例へば überhaupt kaufen, verkaufen と云ふ事は一把一束に買ひ或は賣る事を意味したのである。こゝからして私達は十七、八世紀以後に於ける überhaupt の使用例を明にし得る。一つは「細部はともあれ全體としては」の意味であり、他の一つは「總じて」の意

味であつて「特に」に對立する。まづ後の場合から例示すれば in Orient überhaupt, besonders aber in Persien「總じて東洋に於ては、特にヘルシヤに於ては」とか「Das Leben überhaupt, die Ehe insbesondere ist ein Kampf.」「人生は總じて戰である、分ても結婚は戰である」の如きである。始の例は Die Prosa ist überhaupt betrachtet, allemal natürlicher, als die Poesie.「散文は一般に詩よりも自然である」とか、或は、クライストが彼の論文の表題を Von Deutschland überhaupt「ドイツ一般について」と名づけた如きである。之が近代に於ける「一般」と云ふ言葉の使用法であらう。そして我々にとつて興味ある事は「細部はともあれ全體としては」im allgemeinen, ohne ins einzelne zu sehenの場合に於ては、全體は部分から抽象され、部分の有つ特殊性は抹殺されてゐる事であり「わけては」besondersと對して「總じては」im allgemeinen が用ひられた場合に於ては、部分の特殊性は否定されずして、かへつて全體の内に保有されてゐる事である。この殆んど無意識的に、しかも異なる含意に於て用ひられた「一般」と云ふ言葉の日常的な用法は、しからばカントに於ても何等かの痕跡を止めてゐるのではなからうか。特殊から抽象され、差別から遊離された「一般」と共に、差別に煩はされず、特殊を總合する如き「一般」が、カントに於ても相並んで成立してゐたのではなからうか。言はゞ抽象的普遍と具體的普遍とが同じ一つの

「一般」と云ふ言葉の意味について

「一般」と云ふ言葉によつて表現されてゐたのではなからうか。しかしてその事は逆に言ふならば、カントに於ては「一般」の領域は抽象的普遍から具體的普遍の野を蔽ひ、最も抽象的なる「物一般」から、最も具體的なる「意識一般」にまで達する事を意味するのではなからうか。その事を明かにする事に此の小論は捧げられる。

* 「一般」と云ふ言葉については更に、「總括的に」と云ふ意味から、特にある事柄を強調する意味に用ひられる場合がある。

例へば *Er ist seit langer Zeit krank, überhaupt seit drei Tagen.* 「彼は永らく病んでゐる。わけつゝ、三三日此の方は」の如きである。又それと同じく *überhaupt nicht* は *gar nicht* を意味する。

A

カントに於ても勿論「一般」と云ふ言葉は日常的な使用法に於ての如くに單に副詞として用ひられてゐる場合も屢々である……*von dem, was überhaupt geschieht*,……S. 13; *das überhaupt nichts, was in Raume angeschaut wird, eine Sache an sich sei*. S. 45.* しかし私達は何を特に名詞と結合して學術語として用ひられてゐる場合に向けよう。

* かくの如くに副詞的に使用されゝる箇所を擧げるならば、S. 70. Anmerk. 138, 146, 155, 159, 165, 170, 197, 203, 226, 238, 239, 273, 284, 287, 289, 437, 461, 468, 473, 549 Anmerk. 563. 等

その時直ちに一つの問題を含んで現はれてくるのは表題として用ひられた「一般」の意味である。例へば *Von der Logik überhaupt* S. 79; *Von der Vernunft überhaupt* S. 355;

Von der Ideen überhaupt S. 255. の如き場合である。その時「一般」と云ふ言葉は如何なる意味を有したであらうか。

* かくの如き場合としては更に、Von dem logischen Verstandesgebrauch überhaupt S. 90; Von den Prinzipien einer transzendentalen Deduktion überhaupt S. 105; Von der transzendentalen Urteilskraft überhaupt S. 138. 等

「理性一般について」と題せられた一節に於て、カントは「理性一般を論理的能力」と「超越的能力」 eine Einteilung der Vernunft in ein logisches und transzendentales Vermögen S. 355—356. に分ち得べき事をのべ、しかして「理性をば一般に、規則の能力としての悟性に對して原理の能力と呼んでゐる。こゝに私達の注意すべき事は、カントは「理性一般」なる特別に一般的なる能力を認めんとしたのではない事である。特別の作用を有つ理性一般なるものがあつて、論理的或は超越的なる能力としての特殊なる理性に對立し、別箇の存在を有すると云ふのではないのである。たゞ「理性は一般に、原理の能力であり、具體的には論理的なる場合と超越的なる場合とのある事を教へてゐるのみであるのである。従つて「理性一般について」と云ふ表題は「一般に理性について」と書き改められても毫も支障がない筈である。事實カントは「理性一般について」なる章について「理性の論理的使用について」及び「理性の純粹使用について」なる二つの

節を區分してゐるのである。

之と同じき事態を人は「論理學一般について」及び「理念一般について」に於ても見出し得ると考へるであらう。そしてその事は一應認められてしかるべきである。けだし私達は前者に於ては悟性一般の規則の學としての論理學の定義と、更にそれを一般的悟性使用の論理學及び特殊の悟性使用の論理學へ區分する事について教へられ、後者に於てプラトンに初まる理念の一般的な説明が與へられてゐるからである。即ち私達は前者に於て一般論理學及び特殊論理學と區別されて、論理學一般なるものを有つのではなく、單に一般に論理學についての説明を與へられたのであり、後者に於ても、理念についての一般的な説明が與へられたのみで、特に理念一般なる獨立の對象が與へられたのではないのである。之等の場合に於ても私達は「論理學一般について」の代りに「一般に論理學について」と書き改める事が許されるであらう——論理學一般が決して一般論理學でない事はその明かな保證である——又「理念一般について」に對しては「一般に理念について」と書き改める事が許されるであらう。

* 次の註を見よ。

しかしながら一つの疑問が私達を待ち迎へてゐる。それははたして常に「一般」と

云ふ言葉が上述の如くに我々の思惟によつて遊離された、それ自らは獨立の存在を有せざる抽象を意味するのに過ぎないのであるか、或は假令抽象的ではあるとしても、それ自ら獨立の存在を有するものを意味するのではないかの疑問である。その事はたとへばカントが論理學を悟性一般の規則の學と定義した場合(S. 76, 736)に成立する。なるほど悟性一般なるものは抽象的なるものではあるであらうけれども、それについて一般的に法則が掲げられ得る以上、それ自ら獨立の存在を有するとも考へられるからである。即ち問題は、その事柄について一般に überhaupt 何事かを述語し得る時に、述語せられた處のものは普遍的、allgemein なる存在なりや否やであるとも云へよう。

私は先に論理學一般 die Logik überhaupt が一般論理學 die allgemeine Logik でない事を語つた。しかしながら次の點に注意すべきである。それはカントが「論理學一般について」なる節に於ては超越的論理學については觸れず、ただむしろ主として従來の形式論理學のみ論じ、それを手引として「超越的論理學について」なる次の節を導く備へをしてゐる事である。その事は一應後者がカントによつて初めて見出され、従つて前者に於ては従來の論理學一般、従つて形式的論理學が主として論ぜられてゐるのであるとして説明され得るであらう。しかしながらそれと共に次の如くに解する事も全然不可能ではない。即ち、超越的論理學は内容ある論理學である。時間の純粹直觀を内容とする論理學である。それ故に、従來の形式論理學に對しては、特殊なる論理學であり、形式的論理學は一般的なる論理學である。従つて形式的論理學は特殊化されざる論理學の意味に於て「論理學一般」と呼ばれたのである。と。

「一般」と云ふ言葉の意味について

私は以上に於て、一般と云ふ言葉は、表題として使はれた場合には、一應先のクライストの Vom Deutschland überhaupt に於ての如く、むしろ副詞的に讀まるべきである事を語つた。即ち「理性一般について」の代りに「一般に理性について」と書き改め得るであらうし、又「論理學一般について」の代りには「一般に論理學について」と書き改め得るであらう。従つて「一般」と云ふ言葉は、その言葉によつて述語された所のものが一般的なる存在を有つのではなくして、我々の述語の仕方が一般的なものではなからうかと云ふ事を述べたのであつた。しかもそれと共にカントが普通に「一般」と云ふ語を用ひてゐる場合には對象そのものが何等かの意味に於て、それ自ら一般的なる存在を有つ事、否、表題として「一般」が用ひられた場合に於ても尙かく解し得る餘地の絶無でない事を注意したのであつた。然らばカントに於て「一般」と云ふ言葉が疑ふべくもなくその對象の何等かの獨立的な普遍性を示してゐる場合がないであらうか。

その最も著しい場合として私達は Ding überhaupt 或は Dinge überhaupt と云ふ表現を有してゐるのである。此の言葉に於ては私達は不思議にも實に度々なるカントの

周到な注意を與へられてゐる。即ち此の言葉が初めて現はれてゐる第二版の序文に於ては Ding überhaupt (als Sache an sich selbst) S. XXVII と書かれて「物一般なるものが事柄自體として」意味されてゐる事が教へられてゐる。次に「物一般なる言葉の現はれてゐる個所に於ては……, wenn man von der Sinnlichkeit unserer Anschauung, mithin derjenigen Vorstellungsart, welche uns eigentlich ist, abstrahiert und von Dingen überhaupt redet. S. 51 2 Dingen überhaupt 2 3 4 5 語をわゑゝ／＼ gesperrt にし更にそれに數行つゞいて……, weil bei dem Begriff der Dinge überhaupt von aller Art der Anschauung derselben abstrahiert wird, S. 51—52 と云ひ物一般の概念に於ては物が我々の人間的なる直觀のみか、凡ゆる直觀から抽象されてそれ自體に於て意味されてゐる事を教へてゐる。従つて「物一般」と云ふ概念は當然ほとんど「物自體」Ding an sich「叡知的なるもの」das Intelligible と同意義の語とも解せられる。例へば Der transcendente Gebrauch eines Begriffs in irgend-einem Grundsatz ist dieser: dass er auf Dinge überhaupt und an sich selbst, der empirische aber, wenn er bloss auf Erscheinungen, d. i. Gegenstände einer möglichen Erfahrung bezogen wird. S. 298. に於ては「物一般へそして物自體へ」となつてをうゑ又……dass es nicht über die Möglichkeit der Dinge überhaupt entscheide und das Intelligible, ob es gleich von uns zur Erklärung der

「Erscheinungen nicht zu gebrauchen ist, darum nicht für unmöglich erkläre. S. 590. に於ては「物一般」について論ずる事は自ら叡知的なるものについての論述を歸結する事を教へてゐる。」*

* 物一般を如何に解すべきかの直接なる教示を含むべくいつかの箇處を例擧すれば、

Hieraus fließt nun unwidersprechlich,..... dass die Grundsätze des reinen Verstandes nur in Beziehung auf die allgemeinen Bedingungen einer möglichen Erfahrung, auf Gegenstände der Sinne, niemals aber auf Dinge überhaupt (ohne Rücksicht auf die Art zu nehmen, wie wir sie anschauen mögen), bezogen werden können. S. 303. ノコトハ「物一般」の概念に於ては我々の直観が捨て去られしむる事を教へしむる。その事を教へしむるの語もそのコトハ Aber da in der Anschauung etwas enthalten ist, was im blosser Begriffe von einem Dinge überhaupt gar nicht liegt,..... S. 340 ト也。かゝる箇所に應ずるものト S. 39. 或ハ Anschauung のコトにツシム Sinn の語を語が區別の表徴として用ひらるべきを聯合せしむる。例へば Nach einer natürlichen Illusion sehen wir nun das für einen Grundsatz an, der von aller Dingen überhaupt gelten müsse, welcher eigentlich nur von denen gilt, die als Gegenstände unserer Sinne gegeben werden. S. 610.

かくて「物一般」の概念に於ては我々の直観が除去せられたるからして、それは現象的なるもの、經驗的なるものと對立的に用ひらるべき事となる。たゞ、(in dem blossen Begriffe eines Dinges überhaupt ist es auch wirklich so, aber nicht in den Dingen als Erscheinungen). S. 329. Ob nun jener Grundsatz; dass sich die Reihe der Bedingungen (in der Synthesis der Erscheinungen, oder auch des Denkens der Dinge überhaupt) bis zum Unbedingten erstreckt, seine objektive Richtigkeit habe, oder nicht; S. 365. 或ハ Zuerst ist hierbei anzunehmen, dass die Idee der absoluten Totalität nichts andres als die Exposition der Erscheinungen betreffe, mithin nicht den reinen Verstandesbegriff von einem Ganzen der Dinge überhaupt. S. 443. Folglich werden wir das empirische Prinzip unserer Begriffe der Möglichkeit der Dinge als

Erscheinungen, durch Weglassung dieser Einschränkung für ein transszendentales Prinzip der Möglichkeit der Dinge überhaupt halten. S. 610. 又の他例(頁 S. 327, 328, 648, 698). 又「物一般」を「自然物」に對立せしめたる場所は……. in den Wesen der Naturdinge……. womöglich auch in den Wesen aller Dinge überhaupt, michin als schlechthin notwendig zu erkennen. S. 722.

從つて又「物一般」の範圍は「物自體」のされど大それた等しきものではない…… ; so sollen die Kategorien in ihrer reinen Bedeutung ohne alle Bedingungen der Sinnlichkeit von Dingen überhaupt gelten, wie sie sind, anstatt dass ihre Schenmate sie nur vorstellen, wie sie erscheinen, jense also eine von allen Schenmatten unabhängige und viel weiter erstreckte Bedeutung haben. S. 186, …… oder ob sie (diese reinen Verstandesbegriffe) als Bedingungen der Möglichkeit der Dinge überhaupt auf Gegenstände an sich selbst, (ohne einige Restriktion auf unsere Sinnlichkeit), erstreckt werden können. S. 178. かくの如きの場所は例(頁) S. 337, 628.

かく「物一般」と智知的なものの同一視を成立せしむべきである。 Weil wir das Zufällige nicht anders als durch Erfahrung kennen lernen, hier aber von Dingen, die gar nicht Gegenstände der Erfahrung sein sollen, die Rede ist, so werden wir ihre Kenntnis aus dem, was an sich notwendig ist : aus reinen Begriffen von Dingen überhaupt ableiten müssen. Daher nötigt uns der erste Schritt, den wir ausser der Sinnewelt tun, unsere neuen Kenntnisse von der Untersuchung des schlechthin notwendigen Wesens anzufangen und von den Begriffen desselben: die Begriffe von allen Dingen, sofern sie bloss intelligibel sind, abzuleiten ; …… S. 594—595. 乃至 S. 656, 748 等の使用例をばはなす場合に關するものと考へ得るべきである。

私達は之等の數多き箇處からしてもはや「物一般」をいかに解すべきかについて、少しの疑惑も抱かないであらう。 少くとも「物一般」に於ける「一般」は、我々の述語のしか

たが一般的であると云ふ意味のそれではなくして、従つて單に我々に對してのみ一般的であると云ふのではなくして、述語されたものが、そのものとして一般的な意味を有するのである事、従つてそれ自らに於ける「一般」である事については疑がないであらう。勿論「物一般」なるものも我々が「物」について「一般」に認識し得る以外の何もをも含まないであらう。併し乍ら「一般」の視野に於て「物」が見られた時「物」は單に一般化されて見られてゐるのみではなくして、それ自らが「一般」なるものとして現はれてゐるのである。「物一般」の「一般」は、それ「自體」に於ける「一般」である。我々が單に「一般的」な相に於て思惟したがゆゑに「一般的」であるのではなく、それ自らが「一般的」な構造を有つのである。しからざれば「物一般」が「物自體」と同一視され得る理由はない。「物自體」と同一視され得る以上、それはそれ「自體」に於ける「一般」でなければならぬ。又「物一般」の「一般」はそれ自ら「一般的」なる「一般」である。しからざれば「物一般」が又「徹知的」なるものと同一視され得る理山もない。「徹知的」なるものに於て我々は初めてそれ自らに於て「一般的」なるものを有つからである。「徹知的」なるものは、それ自らが「一般的」な構造を有つのである。

しかしながら問題は、何故カントに於て「物一般」が「物自體」と同一視され、又「徹知的」な

るものと同一視されたかに存する。何故「物」の一般的なる相が、それ自體に於ける「物」と合致し、それが同時に「窺知的なるもの」であり得たかにある。「一般」の野に於てあると云ふ事が、如何にしてそれ自體に於てある事となり得たのか。「物一般」に於ける「一般」が單に「一般化する意味の一般ではない」として、何故全く現象としての物を捨て去つて直ちにそれ自體に於ける物を意味し得たか。もし「一般なる語が單に與へられたすべてのものに共通、一般なるものを意味するのであるならば、我々はいかにしても「物一般」に於て「物自體」を思惟する事を許されない。カントに於てもまづ與へられてゐる所の「物」は現象としての物である。従つてそれを一般の野に於て見たならば、たとへそれが單に我々によつて想定された一般ではなくして、それ自らに於ける一般であるとしても、尙我々の有する處のものは「現象一般」であつて「物自體」としての「物一般」ではないであらう。しかれば何故カントは「物一般」によつて「物自體」を思惟し得たのであるか。この消息が明かになる事によつてのみ我々は「物一般」に於ける「一般」の意味を明かになし得るのである。

しかしながら此の問ひに對する答はずでに最初に與へられてゐたのである。何故かならばカントは既に示した如く「物一般」と云ふ言葉についで「それを直觀する

あらゆる仕方を抽象して「の₃₀₃」とか、或は「如何に我々がそれを直観するかの仕方を顧慮しないで」の₃₀₃」とか云ふ言葉を附加してゐるからである。従つて我々は次の如くに考へなければならぬ。「物一般」に於てはカントは一般的に物を視ると云ふ事を、直観の仕方、わけては人間的なる直観の仕方を離れて物を視る事の意味に解してゐたのである。しかしして人間的なる直観の仕方をはなれて物を見る事は、純粹思惟の立場に於て物を視る事である。純粹思惟の立場に於て物を見る事はノウメナを知る事であり物自體を知る事である。それ故「物一般」は「物自體」と同一視され、叡知的なるものと同一視されたのである。かくの如くに考へるならば更に次の如くに考へ続けなければならぬ。「一般」として知る事は人間の直観を捨てる事である、それ故「一般」に對する特殊は直観の立場に於て初めて現はれるのであると。一般が純粹思惟の立場であるならば特殊は直観の立場でなければならぬ。即ちカントに於ては特殊化の原理は直観であつたのである。そしてこの事は雜多なるもの、特殊なるものは、常に感覺の多樣直観の雜多としてのみ與へられる事によつて周知の事であつたのである。我々は「物一般」に於ては「一般」の野が單に純粹思惟の野である事を知り得た。「一般」とは「物一般」にかゝる限りに於ては純粹思惟の立場に於てのみ捉

へられるのである。しかしながら我々は「一般」を常にかくの如くに解してよいであらうか。「一般」を見る事は常に純粹思惟の立場に於てのみ可能なのであらうか。元來カントの立場が人間の立場であり、従つて人間的なる直観を含む立場である以上、我々はかくては決して「一般」を純粹に知る事は不可能となるのではなからうか。物自體が單に問題的なる概念である様に「物一般」も問題的なる概念に止まらなければならぬのではなからうか。「一般」なるものは、我々が感性の制限を脱した時に、即ち我々自らが純粹に叡知的なるものとなつた時に初めて達し得べき筈であるが、それは我々が人間である限り望み得ざる事ではなければならぬ。「一般」とはしからばカントに於ては常にかゝる問題としての純粹に叡知的なるものに止まつたか。

* たとへばカントは「世界一般」と云ふ語を直ちに叡知的世界と同一視してゐる。その事は一般的なるものをいかにカントが叡知的なるものと考へてゐたかの證となる。Der Mundus intelligibilis ist nichts als der allgemeine Begriff einer Welt überhaupt in welchem man von allen Bedingungen der Anschauung derselben abstrahiertS. 461.

しかしその事は、物自體の概念が物一般の概念と全く相即すると云ふのではない。物自體の概念は物一般の概念より廣い。否、物自體の概念は感覺の雜多と結んでまづ非合理的なるもの、個別的なるもの、根源として捉へられてゐる。しかしそれを叡知的なるもの、ノウメナと解する事は正にそれと對立する物自體の他の一面である。物自體の概念はかくて感性的なるものから叡知的なるものに及ぶ廣き範圍を有する。それはカントの立場が人間の立場であつた事の痕跡である。到る處に於て人間の有限性を指示する標幟である。従つて人間の如何なる能力が問題となつたかに應じて、物自體の意味

「一般」と云ふ言葉の意味について

は異つて現はれたのである。こゝにカントに於ける物自體の概念の多義性の由來が存する。

「物一般」と極めて類似しながら、しかも何等かの相違を思はしめる「對象一般」(der Gegenstand überhaupt 或は客觀一般) [das Objekt überhaupt] と云ふ概念に於て、實は既に純粹に叡知的なるものから、感性的なるものへの一步の近接を認め得るのである。即ち對象一般なる概念に於ては、まづ「物一般」に於てと等しく、直觀的なるものゝ要素は除去されてゐるが、しかしながらそれと同時に「物一般」に於けるとは異つて、直觀的なるものへの要求を含有するのである。即ち對象一般の概念は範疇の概念と相ひ應じ、従つてそれ自らに於ては直觀的なる要素を含まざるも、範疇が圖式化され、直觀化される事を求める如くに對象一般の概念は直觀的なるものを目指すのである。その事は次の箇所よりして明かであるであらう。

まづ「對象一般」及び「客觀一般」に於て直觀的なる要素の除去されてゐる事を示す箇所は(従つてその限りに於ては對象一般の概念は物一般の概念と類似する) *Nun fragt es sich, ob nicht auch Begriffe a priori vorausgehen als Bedingungen, unter denen allein etwas, wenn gleich nicht angeschaut wird, dennoch als Gegenstand überhaupt gedacht wird;.....S. 125 或 24; jene*

[die Apperzeption] geht vielmehr als der Quell aller Verbindung auf das Mannigfaltige der Anschauungen überhaupt und unter dem Namen der Kategorien vor aller sinnlichen Anschauung auf Objekte überhaupt; S. 154. 或は Daher erstrecken sich die Kategorien sofern weiter als die sinnliche Anschauung, weil sie Objekte überhaupt denken, ohne noch auf die besondere Art (der Sinnlichkeit) zu sehen, in der sie gegeben werden mögen. S. 309. 等である。即ち第一の箇處に於ては「何物か」直觀せられざるも對象一般として思惟せられ得る事、第二の箇處に於ては統覺は範疇の名の下に於て、あらゆる感性直觀に先立つて客觀一般に關はる事、第三の箇處に於ては範疇は、客觀が與へられ得る(感性の)特殊な仕方を顧り見ず、客觀一般に關はる事」がとかれてゐる。即ち之等の箇處に於ては對象一般、客觀一般が直觀的なるものと直接には關はりなき事、むしろそれに先立ち、より廣き領域を有つものたる事は云ふまでもない。

* 箇處たりと云ふ S. 120, 411. Anmerk. 873 等、「何物か」の事は明かである。

Durch eine reine Kategorie nun, in welcher von aller Bedingung der sinnlichen Anschauung als der einzigen, die uns möglich ist, abstrahiert wird, wird also kein Objekt bestimmt, sondern nur das Denken eines Objekts überhaupt nach verschiedenen *modis* ausgedrückt. S. 304. 或は……ein jedes Objekt überhaupt, von dessen Art der Anschauung ich abstrahiere. S. 429.

「一般」云々の言葉の意味について

しかしながらいかにもあれ「對象一般」「客觀一般」が「物一般」と異なる理由は前者に於ては明かに主觀への關係が含まれてゐるに反し後者に於てはその關係は一應たちきれてゐる事である。「物一般」の概念には未だ主觀への關係は見出されない。しかしながら對象一般の概念には主觀に對する關係が含まれてゐる。物一般は物自體と同一視され得よう。しかしながら對象一般はよしんば *der nichtempirische, d. i. transzendentale Gegenstand* $\equiv x$ であらう、*der reine Begriff von diesen transzendentalen, (der wirklich bei allen unseren Erkenntnissen immer einerlei $\equiv x$ ist)* A. S. 108, 109.* であるとしても、統覺への關係を有し、決して物自體ではない。後者に於ては直觀的なものは單に缺如してゐるのであるが、前者に於ては要求され滿さるべきものとして缺乏してゐるのである。その事は例へば *So wie zum Erkentnisse eines von mir verschiedenen Objekts ausser dem Denken eines Objekts überhaupt (in der Kategorie) ich doch noch einer Anschauung bedarf, dadurch ich jenen allgemeinen Begriff bestimme,....* S. 158. よりして明かであらう。對象一般は自己の内容を限定する爲に直觀を要求するのである。かく對象一般の世界は單なる範疇の對象界であるが故に、範疇が直觀によつて自らの内容を限定する如く、單に抽象的な對象一般の世界は自己を具體化し、内容的に自己を限定する事を要求する

に到る。その明かな證左はカントが範疇の定義を與へてゐる著明な次の箇處に於ても認められるのである。Vorher will ich nur noch die Erklärung der Kategorien voranschicken. Sie sind Begriffe von einem Gegenstande überhaupt, dadurch dessen Anschauung in Ansehung einer logischen Funktionen zu Urteilen als bestimmt angesehen wird. S. 128. ^{**}

* 特にAとして區別されてゐない限り、すべての引用は純粹理性批判の第二版による。

** 「對象一般」「客觀一般」の世界が純粹なる範疇の對象界であり、従つて範疇が圖式化を求め、直觀の内容を求める如くに對象一般が直觀内容による自己限定を求める事を示す二三の箇處を掲げるならば、

..... demnach werden Begriffe von Gegenständen überhaupt als Bedingungen a priori aller Erfahrungskennntnis zum Grunde liegen;.....S. 126. それは經驗認識の根柢をなすものなるが故に、經驗認識をして經驗認識たらしめる直觀的なものと關係を有し事は「*だんまじり*」なものなり。

.....Kategorien, welche das Denken eines Objekts überhaupt durch Verbindung des Mannigfaltigen in einer Apperzeption ausmachen. S. 157. 或は

Nun ist alle uns mögliche Anschauung sinnlich (Ästhetik), also kann das Denken eines Gegenstandes überhaupt durch einen reinen Verstandesbegriff bei uns nur Erkenntnis werden, sofern dieser auf Gegenstände der Sinne bezogen wird. S. 146. 同様の意味を語る箇處は「同じく」S. 74, 146, 188. 等。

我々はもはや對象一般をいかに解すべきかについて、更に多くの言葉を費す必要を見ない。それはそれ自らとしては「物一般」と等しく直觀的なるものを含まざるも

「一般」と云ふ言葉の意味について

のであるが、他面に於て「物一般」と異り、直觀的なるものへの要求を有ち、言はゞ、直觀的なるものに依つて滿さるべき空虚を自らの内に含むものなのである。直觀への場所を含むものなのである。しからば何故かくの如き空虚なる直觀への場所を含む純粹範疇の對象界が對象一般と呼ばれたのであらうか。對象一般に於ては何が特に一般的なのであらうか。

もしそれがカントに於て常に特殊化の原理を意味した直觀的なるもの、全然の缺如に基くものであるならば、我々は「物一般」の概念を有つのみで、未だ「對象一般」の概念には到らないであらう。「對象一般」が「物一般」と異なる所以が、前者に於ては後者に於けるのは異り直觀的なるものへの傾向を含む點に存するならば、私達は前者の内に直觀的なるものを認めなければならぬ。しかもそれは對象一般の「一般」たる所以を傷けるものであつてはならないからして、直觀に於ける一般的なるものでなければならぬ。即ち直觀一般が含まれてゐるのでなければならぬ。かくて私達は單に叡知的なるもののみ意味すると考へられた「物一般」からして、直觀的なるものへの場所を含む「對象一般」の概念に移り來つたのである。しからば「對象一般」に於ける一般は「物一般」に於ける一般と如何なる點に相違が存するのであらうか。

私達は物一般に於て全く問題的なる概念を有したのであつた。従つて「物一般」に於ける一般に於ては單に疑問的なる、全く無規定の一般を有したと考へざるを得ない。しかるに「對象一般」に於ては、その一般は少くとも直觀一般による限定の可能を含むものであるが故に「可能」に特殊を含む一般でなければならぬ。しからば特殊化の可能を含む「一般」とは如何なる一般であるであらうか。その事を明かにするために「對象一般」の内に含まれてゐると言つた直觀一觀の意味を明かにしよう。

* 「對象一般」の概念が自らの内に特殊化の可能を含む事は、カントが「フアエノメナとノウメナとへあらゆる對象一般を區別する理由について」 Von dem Grund der Unterscheidung aller Gegenstände überhaupt in Phenomena und Noumena S. 394. なる章に於て、對象一般をフアエノメナとノウメナとに區分した事よりしても知られるであらう。勿論その場合に於ては一般と云ふ言葉は單に總ての對象の總括と云ふだけの意味とも解し得られよう。併し乍らカントに於てはノウメナとフアエノメナとが同列に對象として考へられたのではなくして、ノウメナが感性の制限の下に立つた時、フアエノメナと呼ばれたのである。従つて對象一般について感性化の方向を除去して考へればノウメナとなり、感性化の方向を實現せしむればフアエノメナとなるのである。それ故對象一般の内にカントがフアエノメナを含ましめたと云ふ事は疑ふべくもなく、對象一般が直觀的なるものへの方向を含んでゐたしるしである。尙ほの 335. も之と關聯して重要な箇所である。

** Gegenstand überhaupt と Gegenstände überhaupt 更には alle Gegenstände überhaupt との如く、「一般」が單數形と結合する場合と複數形と結合する場合との意味の異同の有無については後を見られたい。

カントは純粹理性批判第二版^{*}の諸處に於て直觀一般と云ふ言葉を用ひてゐる。それによつて何が意味せられてゐたかを明かにするために二三の箇處を擧げて見よう。

^{*} 直觀一般 Anschauung überhaupt と云ふ語は K. d. r. V. 第一版の論釋論には見出されなかつた。従つて此の語は第一版と第二版の相違、従つて想像力の問題の際には注意せらるべきである。

Die Apperzeption und deren synthetische Einheit ist mit dem inneren Sinne so gar nicht einerlei, dass jene vielmehr als der Quell aller Verbindung auf das Mannigfaltige der Anschauungen überhaupt und unter dem Namen der Kategorien vor aller sinnlichen Anschauung auf Objekte überhaupt geht; S. 154 或^レ

Diese synthetische Einheit aber kann keine andere sein, als die der Verbindung des Mannigfaltigen einer gegebenen Anschauung überhaupt in einem ursprünglichen Bewusstsein den Kategorien gemäss, nur auf unsere sinnliche Anschauung angewandt. S. 161.

Nun ist aber diese synthetische Einheit als Bedingung apriori, unter der ich das Mannigfaltige einer Anschauung überhaupt verbinde, wenn ich von der beständigen Form meiner innern Anschauung, der Zeit abstrahiere, die Kategorie der Ursache, durch welche ich, wenn ich sie auf meine Sinnlichkeit

anwende, alles, was geschicht, in der Zeit überhaupt seiner Relation nach bestimme. S. 163.

此等の箇處に於て「直觀一般」と云ふ言葉がそろつてゲシュペルトにされてゐる事は、私達に、それに特別の意味が附與せられてゐたのではなきかを思はしめるに充分である。しからば此等の箇處からして何を私達は教へられるであらうか。

まづ私達の注意に價する事は「直觀一般」が統覺及び範疇との關聯に於て用ひられてゐる事である。而して次に此等の「直觀一般」が揃つて das Mannigfaltige der Anschauung überhaupt として「雜多なるもの」に關はつてゐる事である。その事は何を意味するのであらうか。

「直觀一般」の解釋に手がかりを與へるものは、演繹論に於ける次の句である。In der metaphysischen Deduktion wurde der Ursprung der Kategorien a priori überhaupt durch ihre völlige Zusammenreffung mit den allgemeinen logischen Funktionen des Denkens dargetan, in der transzendentalen aber die Möglichkeit derselben als Erkenntnisse a priori von Gegenständen einer Anschauung überhaupt (§§ 20, 21) dargestellt. S. 159. 此の句に於ける von Gegenständen einer Anschauung überhaupt の「一般」が對象に關はり「直觀の對象一般」と讀まるべきではなく、却つて「直觀一般」の對象と讀まるべきである事は、參照を要求された第二十一節に於

て……dem Mannigfaltigen einer Anschauung überhaupt. S. 145. の句がありしかして之は先に示された例に従つて、直観一般の多様と讀まるべきであるからである。しかれば何故之等の箇處に「直観一般」の解釋の手がかりがあるであらうか。蓋し此の演繹論第二十一節に於ては、カントが「以上の諸節に於て範疇の演繹の前半がなされた。しかしてその際に我々の直観の特殊なる仕方を顧慮せず、それがたゞ我々に與へられるものなる事をのみ念頭においた」事を語つてゐるのである。而して更にカントは「Die reinen Verstandesbegriffe sind von dieser Einschränkung frei und erstrecken sich auf Gegenstände der Anschauung überhaupt, sie mag der unsrigen ähnlich sein oder nicht, wenn sie nur sinnlich und nicht intellektuell ist. Diese weitere Ausdehnung der Begriffe über unsere sinnliche Anschauung hinaus hielt uns aber zu nichts. S. 148 更に數行おいて Unsere sinnliche und empirische Anschauung kann ihnen allein Sinn und Bedeutung verschaffen. S. 149. と云つてゐる。しかして unsere sinnliche Anschauung について二度まで「我々の」と云ふ語をゲシムヘルトにしてゐる事を思へば「直観一般」なるものが「我々の直観」と對立して使はれてゐる事は、だぶちでもないであらう。それと同様の事柄は Die reinen Verstandesbegriffe beziehen sich durch den blossen Verstand auf Gegenstände der Anschauung überhaupt, unbestimmt ob sie die

unsrige oder irgendeine andere, doch sinnliche, sei, sind aber ebendarum bloss Gedankenformen, wodurch noch kein bestimmter Gegenstand erkannt wird. S. 150. に於ても確められる。即ちカントは我々の直観従つて時間に於ける直観に限らず、一般に與へられ得る可能を「直観一般」と云ふ言葉で言ひ表したのである。知的直観以外の直観を、それが時間に於けるか否かに無規定に、直観一般と呼んだのである。しかしてカントは範疇がまづかゝる直観一般に妥當する事を證明し、次にかくても尙ほ範疇の對象が無規定であるが故に、特に時間に於ける我々の直観への妥當を證明し、それによつて範疇の演繹を完成したのである。*

* その事は純粹悟性概の先驗的演繹第二十一節を注意深く檢する事によつて明かであらう。

しからばかゝる「直観一般の雑多」とは何であつたか。我々はそれをカントが figurliche Synthese に就て語つてゐる場所から推して、次の如くに考へ得るであらう。即ち figurliche Synthese が我々先天的なる人間的直観の多様の綜合であるに對して直観一般の多様の綜合が synthesis intellectualis と呼ばれたのであるが故に、直観一般の多様も亦先天的なる多様であつた筈である。と。その事を證據づける箇處は…… synthetische Einheit der Apperzeption der Mannigfaltigen der sinnlichen Anschauung a priori…… als die

Bedingung, unter welcher alle Gegenstände unserer (der menschlichen) Anschauung notwendigerweise stehen müssen;.....S. 150 及び Diese Synthesis des Mannigfaltigen der sinnlichen Anschauung, die a priori möglich und notwendig ist, kann figurlich (synthesis speciosa) genannt werden, zum Unterschiede von derjenigen, welche in Anschauung des Mannigfaltigen einer Anschauung überhaupt in der blossen Kategorie gedacht würde und Verstandesverbindung (synthesis intellectualis) heisst; beide sind transszendental, nicht bloss weil sie selbst a priori vorgehen, sondern auch die Möglichkeit anderer Erkenntnis a priori gründen. S. 151. (menschlich 及び Mannigfaltigen の ベルトは筆者)

私達は以上によつて直観一般が何を意味したか、又直観一般の多様が何を意味したかを明かになす手がかりを得たであらう。即ち直観一般は我々の人間的なる直観に對し、その人間的と云ふ特殊性を除去し、凡そ直観と呼ばれ得べきすべてのものに共通なる所以のものを意味したのである。あらゆる直観をして直観と呼ばしむべき所以のものを意味したのである。しかも看過してはならない事は、そのあらゆる直観を一般に直観たらしむべき所以のものが、單に直観の本質と云ふ如き形に於て把握せられたのではなくして、即ち種々なる直観の具體相から抽象されて例へば

プラトンのイデヤがそうであつたと云はれる如くに、現實的なる直観と遮斷されて、別箇の世界に於ける本質として把握されたのではなくして、現實的なる直観をも總括する如き意味に於て思惟せられてゐた事である。即ち人間的なる直観に對して全く性質を異にするものとして、 ψ はなく、むしろそれに何等かの特殊化が附加されたならば、直ちに人間的直観として具體化され得べき、言はゞ原型として考へられてゐた事である。それ故にのみカントは「直観一般」に於て非人間的なる直観である知的直観を除外し「感性的でさへあるならば、それが我々の直観であらう」と他の直観であらうと直観一般は「S. 150.」と云ふ如き表現を用ひ、又範疇の演繹をまづ直観一般についてなし、次にその具體化として人間的なる直観について行つた事も了解せられ得るであらう。直観一般は従つて人間的直観に對し別箇の世界を形成する本質の如きものではない。それは自らの内に人間的直観への具體化を含む處の、人間的直観の地盤である。根源である。人間的直観がその Ekypos であるが如き Archetypos を意味するのではなからうか。人間の先天的なる直観の多様に對して、直観一般の多様をカントが考へた事も、かくの如き解釋からしてのみ理解され得るのではなからうか。かくて私達は直観一般に於ける一般が如何なる意味のものなるかをも

理解し得る。それは人間的なる現實の直觀を單に一般に總括するのみのものではない。それは人間的直觀の根源であり、適切には原型である。従つてそれは現實的なる人間の直觀から離れたものではなくして、自らの内に多様化、特殊化を含むものであつたのである。しからば「一般」が特殊化し多様化する事は如何にして可能か、それを明かにすることによつて私達は初めて「一般」の意味を充分に理解し得るであらう。

直觀一般は自己を特殊化し多様化する。その事はカントが屢々直觀一般を人間的なる直觀と範疇との媒介の位置におき、範疇の具體化としての圖式時間と同一の役目を演せしめんとしてゐる事によつて推察される。此の點に立入る事は圖式論の展開を必要とするのであるが、それは別箇の機會に譲られなければならない。私はただ二三の重要な箇處を指示する事を以て満足しよう。まづ先にも引用した次の句に注意を向けよう。

„Diese synthetische Einheit aber kann keine andere sein, als die der Verbindung des Mannigfaltigen einer gegebenen Anschauung überhaupt in einem ursprünglichen Bewusstsein den Kategorien gemäss, nur auf unsere sinnliche Anschauung angewandt. S. 161. 此の綜合的統一は根

源的意識に於ける所與直觀一般の多様の——範疇に従へる——結合の統一が感性的直觀の上に適用されたものに他なる筈はない。」ここではもはや人は感性的直觀と直觀一般との區別を看過する事は許されないのであらう。直觀一般の多様の範疇的なる統一が感性的直觀に適用 anwenden されると云ふのであるからである。しかしてその事は又範疇が直ちに感性的直觀に適用されたのではなくして直觀一般の多様を媒介としてなされたのである事を思はしむるのに充分であらう。

* 尚ほ同様の意味に解するべき場所は Eben dieselbe synthetische Einheit aber, wenn ich von der Form des Raumes abstrahiere, hat im Verstande ihren Sitz und ist die Kategorie der Synthesis des Gleichartigen in einer Anschauung überhaupt, d. i. die Kategorie der Grösse, welcher also jene Synthesis der Apprehension, d. i. die Wahrnehmung durchaus gemäss sein muss: S. 162. ノンでは量の範疇は直觀一般の同質なるもの、綜合の範疇として考へられ、我々の經驗的なる空間の表象は、その空間への適用なのである。次に、

Nun ist aber diese synthetische Einheit als Bedingung a priori, unter der ich das Mannigfaltige einer Anschauung überhaupt verbinde, wenn ich von der beständigen Form meiner inneren Anschauung, der Zeit, abstrahiere, die Kategorie der Ursache, durch welche, ich, wenn ich sie auf meine Sinnlichkeit anwende, alles, was geschieht, in der Zeit überhaupt seiner Relation nach bestimme. S. 163. ノンでは因果の範疇は直觀一般の多様の綜合の範疇であり、我々の經驗界に於ける因果は、時間へのその適用なのである。

従つて直觀一般は範疇と人間的なる直觀との媒介者として當然又直ちに人間の

直觀形式である時間及び空間と同一視される事は出来ない。しかもそれは又人間的なる直觀と範疇との媒介者として、人間の直觀と同一點を有さなくてはならない。しかるに人間的なる直觀は總じて時間に於ける直觀であるが故に、その自己限定が直ちに時間的なる意味を有し得るものでなければならぬ。カントが *Dagegen steht die reine Form der Anschauung in der Zeit bloss als Anschauung überhaupt, die ein gegebenes Mannigfaltiges enthält, unter der ursprünglichen Einheit des Bewusstseins lediglich durch die notwendige Beziehung des Mannigfaltigen der Anschauung zum Einem* : « Ich denke » ; also durch die reine Synthesis des Verstandes, welche a priori der empirischen zum Grunde liegt. S. 140. と語り、時間の直觀形式と言はずしてわざ／＼時間に於ける直觀の純粹形式と言ひ、しかもそれを單に直觀一般(ゲシユペルト筆者)として見た場合に既に「我考ふ」との必然的な關係を通じて、意識の根源的統一の下に立つと述べてゐる事は、時間をカントが直觀一般の限定として考へてゐた事の證佐でなければならぬ。我々の直觀は既に直觀一般として意識の根源的統一の下に立つのである。かかる根源的統一を更に時間化する事により、即ち時間に適用する事によつて、我々は具體的なる經驗的認識に達するのである。かく云ふ事は直觀の雜多を綜合的統一に齎した場合に對象を認識すると云ふ表現

の半面である。雑多を統一すると云ふ考方の根柢には所與に對してアプリオリであり、zum Grunde liegenする處の構造が場所的に成立してゐる事が豫想されてゐる。das Gegebeneの側よりしてではなく zum Grunde liegendする Grundの側より考へれば時間の直觀の根柢には直觀一般が構造上の地盤として先行してゐる。synthesis speciosaの根柢には synthesis intellectualisが存するのである。カントの圖式論についてはクルティウスの指摘した如き synthesis-Schematismus と Subsumtionsschematismus の二面があり、(Das Schematismuskapitel in der K. d. r. V. Philologische Untersuchung. Kant-Studien XIX, S. 338ff.)しかして眞にカント的なる考方としては前者のみが採用さるべきであるとされ易いのであるが、構造上の關係より考へれば Subsumtionsschematismus にも亦すて去り難き意味があるのではなからうか。しかして範疇はまづ直觀一般に於て具體化され更に時間を通じて現實化されるのではなからうか。最も根源的なる直觀は時間ではなくして却つて直觀一般でなければならぬ。直觀一般に於て「時間そのものは止まる」事も直觀されるのでなければならぬ。直觀一般はアリストテレースの sensus communis にも比すべきものではなからうか。超越的想像力の關はる處のものは單に内感の形式としての時間ではなくして、直觀一般ではなかつたであらう

か。カントに於ける内感と外感の關係の問題は、直觀一般を更にその根柢に置く事によつて幾分の明瞭さを獲得し得ないであらうか。とにかく、カントが直觀と範疇との媒介を圖式「時間」の内に見出しながら、圖式を時間として當然屬せしめるべき感性に屬せしめず、想像力に屬せしめた理由はここに存しなかつたか。ハイデッガーの云ふ如く「純粹直觀はその本質上純粹想像である」[Heidegger: Kant und das Problem der Metaphysik. S. 136. としても、その純粹直觀はハイデッガーに於ての如く直ちに時間ではなくして、まづ直觀一般でなければならぬ。しからざれば空間を全く時間化する危険を免れ難く思はれる。且つ又時間の直觀に圖式がつきるならば、カントが圖式論に於て、時間をすら想像力を通じて産出せしめた理由はいづこに存するか。直觀一般の限定として時間が成立するのではなからうか。かくの如き意味に次のカントの言葉を解するのは不可能であらうか。カントは云ふ。「即ち數とは同種なる直觀一般の多様の——余が時間そのものを直觀の覺知に於て産出する事によつてなされる——綜合的統一に外ならぬ」S. 182.*と。

* 尙ほ同一の意味に理解さるべき場所を掲げれば、「直觀の公理」の初めの如きもそうである。即ち

.....durch die Synthesis des Mannigfaltigen, wodurch die Vorstellung eines bestimmten Raumes oder Zeit erzeugt werden,

……こゝではまづ、多様の綜合によつて、初めて限定された空間、時間の表象が産出せられる、と云ひつゞいて、*Nun ist das Bewusstsein des mannigfaltigen Gleichartigen in der Anschauung überhaupt, sofern dadurch die Vorstellung eines Objekts zuerst möglich wird, der Begriff einer Grösse (Quant), S. 202, 203* と述べ、その多様とは「直観一般」の多様であり、そこに量の概念が存する事を云ふのである。即ち直観一般の多様を通じて、限定された空間時間の表象が産出されるのである。

直観一般の意味は以上によつて明かとなつたであらう。それは人間的なる直観に對してその原型を意味する如き地盤である。あらゆる人間的なる直観はそれが直観である限り「直観一般」の特殊化であり、具體化である。ここに私達は「一般」が如何なる意味の一般であるかを明かにし得る便を見出す。カントは單に直観一般に於てのみでなく「物一般」「對象一般」に於ても *Ding überhaupt* と *Dinge überhaupt*, *Gegenstand überhaupt* と *Gegenstände überhaupt*, *Anschauung überhaupt* と *Anschauungen überhaupt* と云ふ如く單複兩形と「一般」と云ふ語を結合して用ひてゐる。そしてカント自らによつては何故單複兩形と結合し得たかについての指示は少しもない。カント自ら兩形を無意識的に用ひてゐるのである。しかしながら疑問は、何故カントが之の二つの形を用ひたのか、又二つの形を流用し得たためには、その兩者をたとへ無意識的にもせよ結

合し得る如き意味が「一般」と云ふ語に存してゐたのではなからうか、そのそれである。しかししてその疑問は「一般」が「原型」として解される事によつて解かれはしないであらうか。けだし對象をすべて對象たらしめる所以のものとして原型を解すれば、それは單數形に於て、*der Gegenstand überhaupt* として表現されるのにふさわしいであらうし、又それと共にその原型は具體的にはあらゆる對象一般に於て實現されてゐるのであるから、それと離して考ふべきでなくその際には *alle Gegenstände überhaupt* と名づけられて、支障がないであらうから。即ち「一般」と云ふ言葉は一面に於て本質的なものであると共に、他面に於ては直ちにその具體化でもあるのである。

しかしながら人は之に對して「物一般」の説明に於て、我々の學び得た事は、それが單に叡知的なる抽象であつて、何等自らの内に具體化、特殊化の原理を含まざるものであつた事を以て反對するかも知れない。かかる人に對しては次の如くに答へたい。まことに「物一般」は抽象的な存在であつたであらう。しかしながらカントが「物一般」と「物々一般」との區別をなし得たのは何によるか。けだしそこに尙ほ「物々」をして「物」たらしめる方向と「物」をして「物々」たらしめる方向とがあつたからでなければならぬ。しかししてカントが「物一般」について尙ほ形式と内容を分ち得るであ

らう事を述べてゐるのは、之に對する答へでなければならぬ。即ちカントは云ふ。
 „ Auch wurde in Ansehung der Dinge überhaupt unbegrenzte Realität als die Materie aller Möglichkeit,
 Einschränkung derselben aber (Negation) als diejenige Form angesehen, wodurch sich ein Ding vom
 andern nach transszendentalen Begriffen unterscheidet. S. 322.

次に更に注意を要求したい事は、*überhaupt* は常に同じ度合に於て、單數と複數の結合、即ち本質と存在、質と量との綜合であるのではなくして、その綜合の度合に發展があることである。その最も單純な姿は上述の「物一般」に於けるそれであらう。

そこに於ては單に「思惟一般」——その意味は例へば……, die Einheit des Denkens überhaupt (welche von der Art, wie ein Gegenstand gegeben werden mag, völlig abstrahiert.) S. 314 よりしても察せられるであらう——の對象として、極めて抽象的なる綜合を示すに止まる。しかしながら「對象一般」に到つては、その内に既述の意味に於ける「直觀一般」の多様を包含せしめ得る事によつて、かなりに充分なる意味に於て、具體的なる綜合が實現されてゐるのである。しかしながら「一般」の更に深き意味は、尙ほここに止まらない。それは我々の本來の目的であつた意識一般に到つて初めて完成されるのである。しかして私達はまづ「經驗一般」die Erfahrung überhauptの概念を明かにする事によつて、意

識一般への路を平坦ならしめよう。

純粹理性批判の問題は窮極する處、經驗一般の可能の問題であつたとも言ひ得るであらう。しからは經驗一般とはカントにとつて何を意味したか。まづ、經驗一般と云ふ言葉の直接の解明の見出される箇處の引用から始めよう。

Ein Begriff, der eine Synthesis in sich fasst, ist für leer zu halten und bezieht sich auf keinen Gegenstand, wenn diese Synthesis nicht zur Erfahrung gehört, entweder als von ihr erborgt, und dann heisst er ein empirischer Begriff, oder als eine solche, auf der als Bedingung a priori Erfahrung überhaupt (die Form derselben) beruht, und dann ist es ein reiner Begriff, der dennoch zur Erfahrung gehört, weil sein Subjekt nur in dieser angetroffen werden kann. S. 267. 11

の箇處に於てカントは概念に二種の區別の存する事を述べ、一つは經驗より得られた「經驗概念」他の一つはそれに「經驗一般」經驗の形式が基く純粹概念なる事を語つてゐる。而して今の我々の注意を引く事は經驗一般と云ふ語につづいて、その意味を制限するために括弧の内に經驗の形式と云ふ語が挿入されてゐる事である。その事は經驗一般が直ちに經驗の形式と同一視されてゐるのでないとしても、經驗に於

て一般なるものは即ちその形式なる事、少くとも経験を「一般」の野に於て考察する事は、それを先天的なる形式の側より見る事を意味する事を教へるのである。

* 一般と云ふ言葉が、かく先天的なる形式の側より見る事を意味する事の例は「経験一般」と云ふ語とほゞ相覆ふとも考へられる。「自然一般」[Natur überhaupt]に於ても見られる。即ち……die Natur. (bloss als Natur überhaupt betrachtet)……(als natura formueller spectata) [「單に自然一般と見做されたる(自然は)形式から見られた自然として」]考へられてゐるのである事、又、それにつゞいて eine Natur überhaupt, als Gesetzmässigkeit der Erscheinungen in Raum und Zeit S. 165. 「時間及び空間に於ける合法則性としての自然一般」と云ふ句のある事からしても明かであらう。尙ほそれに引きついで、……; von Erfahrung aber überhaupt und dem, was als ein Gegenstand derselben erkannt werden kann, gehen allein jene Gesetze a priori die Belehrung, S. 165. なる句が見出される。この Erfahrung aber überhaupt の「一般」がたとへば、詞的に讀まるべきものであるにしても、要するに経験及びその對象について一般的な認識を興へるものは、先天的法則である事がとかれてゐるのであり、此の場合に於ても経験に於てその法則的な側面が主として顧慮されてゐるのである。しかしながら、こゝに於ては後に示す如き意味への擴張の萌芽がある。

「経験一般」に於ける「一般」が経験に於てその法則の側面を主として意味する事からして、又「経験一般の形式」die Form der Erfahrung überhaupt * なる結合の屢々現はれる理由も理解されるであらう。経験一般と云ふ言葉が既に経験に於てその一般的な側、即ち失天的なる形式の側面に人々の注意を引くからである。しかしながら経験一般と云ふ言葉は常に形式の側をのみ意味したのであつたらうか。

* 「經驗一般の形式」と云ふ言葉の見出される箇所は例へば

Diese, nämlich die objektive Form der Erfahrung überhaupt, enthält aber alle Synthesis, welche zur Erkenntnis der Objekte erfordert wird. S. 267. 或ハ S. 268, 269. 更ニ

Dem überhaupt würden wir nach Gesetzen der Sinnlichkeit und dem Kontext unserer Wahrnehmungen in einer Erfahrung auch auf die unmittelbare empirische Anschauung derselben stossen, wenn unsere Sinnen feiner wären, deren Grobheit die Form möglicher Erfahrung überhaupt nicht angeht. S. 273. K^r

.....dass der Verstand a priori niemals mehr leisten könne, als die Form einer möglichen Erfahrung überhaupt zu antizipieren. S. 303.

形はち、異なるも意味の上よりして同一視せらるゝやうのは、

.....als formale und objektive Bedingungen einer Erfahrung überhaupt.....S. 271.

.....als formale Bedingungen der Bestimmung der Gegenstände in der Erfahrung überhauptS. 272.

.....die Bedingung möglicher Erfahrung überhaupt.....S. 663. 等。

しかしながら實は「經驗一般の法則或は形式」と云ふ表現が用ひられてゐると云ふことが、既に、經驗一般が單に法則的なるものとのみ考へられてはならない徴なのである。經驗一般は法則としての側よりしても考察され得べきではあるけれども、經驗一般は單に法則的なる側面につきるべきではない。けだし法則的なる側面があると共に、しからざる側面があるが故にこそ、わざわざ「形式的に見られた自然」と云ふ注意も必要であり、それについて法則を語り、形式的條件を云々する事も可能なので

ある。しからばその法則以外の側面とは何であるか。それは「形式的に見られた自然」*natura formaliter spectata* と云ふ言葉にやや先立つて、それに對して「内容的に見られた自然」*natura materialiter spectata* S. 163. なる言葉が現はれてゐる事からしても推察される。即ち「經驗一般」に於て形式の側面に對立するものは内容の側面なのである。従つて私達は「經驗一般」と云ふ言葉に於て内容への場所をたとへ内容そのものではないとしても含んだ形式的全體を考へ得る餘地があるであらう。かくの如き意味に「經驗一般」を解すべきである箇所の一つに、次の著明な句を數へる事も不可能ではないであらう。即ち「經驗一般」可能の制約は同時に「經驗の對象可能の制約である…」：die Bedingungen der Möglichkeit der Erfahrung überhaupt sind zugleich Bedingungen der Möglichkeit der Gegenstände der Erfahrung— S. 197. 或は Da also Erfahrung als empirische Synthesis in ihrer Möglichkeit die einzige Erkenntnisart ist, welche aller andern Synthesis Realität gibt, so hat diese als Erkenntnis apriori auch nur dadurch Wahrheit (Einstimmung mit dem Objekt), dass sie nichts weiter enthält, als was zur synthetischen Einheit der Erfahrung überhaupt notwendig ist. S. 196—197.)) には明かに「經驗一般」の綜合的統一が語られてゐるが故に、それが單に形式的なるものにつぎない事は云ふまでもなからう。或は—dass nämlich die Kategorien von seiten

des Verstandes die Gründe der Möglichkeit aller Erfahrung überhaupt enthalten. S. 167.*

* 尚ほかゝる例に加へるや、*Analogen der Erfahrung, welche alle reale Verknüpfung in einer Erfahrung überhaupt darlegen.* S. 272. 或は

Der Verstand gibt apriori der Erfahrung überhaupt nur die Regel nach den subjektiven und formalen Bedingungen sowohl der Sinnlichkeit als der Apperzeption, welche sie allein möglich machen. S. 283. 及び S. 465, 524, 690 等之等には形式に支配された経験全般の意味が明かである。

しかしながら「経験一般」の意味は内容への場所を含んだ形式的全體の意味にはつきない。それが要するに経験の全體に屬するものであるならば、その内容の如何とはせずに、すべて経験界に屬するものは経験一般と呼ばれたのである。かゝる使用例は、*Er [der kosmologische Beweis] lautet also: Wenn etwas existiert, so muss auch ein schlechthin notwendiges Wesen existieren. Nun existiere zum mindesten ich selbst; also existiert ein absolult notwendiges Wesen. Der Untersatz enthält eine Erfahrung, der Obersatz die Schlussfolge aus einer Erfahrung überhaupt auf das Dasein des Notwendigen.* S. 632—633 けれどし何等かのものが存在するならば、その根拠として絶対に必然なる神が存在すべきであるとの命題について、その何ものかをカントは「経験一般」と云ふ言葉でおきかへてゐるからである。即ちこゝでは「経験一般」とは任意の「経験一般」の意味である。ほぼ同様に解さるべき箇處は、S. 642 (尤もこの箇處は先に述べた形式的全體の意味をも含んでゐる) S. 660. 以上によつて私達は「経験一般」の意味を明かになし得たかと思ふ。それはまづ「経験の形式的側面の謂であつた。而して次にかかる形式的地盤によつて可能となり得る経験の全體であつた。勿論かく言つても、その「経験の全體」は「経験的内容」によつて具體的に充足された眞に具體的なる「経験の全體」ではなくして、寧ろただ内容

を可能的に包含し得る全地平線を意味したのである。即ち可能的經驗の全體であり、可能的立場に於て見られた經驗界である。従つて經驗一般とは單に經驗の形式ではなくして同時に内容への場所をも含むものである。その點に於て單なる範疇と異り直觀一般によつて圖式化された、従つて内容への通路を有つ「對象一般」と同じ程度に於ける「一般」であるとも云へるであらう。しかれば對象一般と經驗一般とは單に言葉の上の相違のみを有し、實質的には同一の事態に關はるのであらうか。

否。兩者は同じ場面に於て成立しながら、その「一般」の度合に於て重要な差別を有するのである。けだし對象一般は經驗一般の場所に於てのみ成立し、前者は後者の部分であり、後者は前者の全體たるの意味を有するからである。なるほど對象一般に於ても單數と複數との統一はあつたであらう。本質と存在との統一があつたであらう。der Gegenstand überhaupt \sim die Gegenstände überhaupt とが「 \bar{e} 」を他の Grundtypus と見る事によつて、前者にも單なる Sosein と異なる Dasein の色彩が興へられると共に——原型と本質との差別は、原型には常に箇別化の意味があり、又それ自ら存在的なるものなるにも關はらず、本質には一應個體と存在とへの内的關係が遮斷されてゐる點に存する——後者に於ては、その Dasein が單なる Dasein と異なる Sosein に於ける

Dasein たるの意味を有したのである。しかしながら die Gegenstände überhaupt に於ては未だ對象一般相互の間に、それをそれ自らに於て總括して、獨立的な一全體を構成せしむるの意味はない。言はば種々なる人間一般が原型としての人間一般の具體化であるとしても、それ等の人間が一世界を形成すると云ふ意味がない。しかし正にかかる孤立的なる對象一般に對して、それを一つの世界に統一する働を演ずるものが「經驗一般に他ならないのである。カントは我々の有する經驗が要するに唯一の經驗であることをしばしば述べてゐる。我々が雑多の經驗を有すると思つてもそれは終に一つの經驗の内なる事である。Es ist nur eine Erfahrung, in welcher alle Wahrnehmungen als im durchgängigen und geschäftsmässigen Zusammenhange vorgestellt werden; eben sowie nur ein Raum und Zeit ist, in welcher alle Formen der Erscheinung und alles Verhältnis des Seins oder Nichtseins stattfindend. S. 110. A.」ながら我々がただ一つの空間と時間とを有つ様に、我々はただ一つの經驗を有つのみなのである。そして我々は決して此の唯一の經驗の外に出る事は出来ない。いかに我々が經驗の外に出得たと信じて、それはすべてのことが我々の此の唯一の時間を脱し得ない如く——脱し得たと信じて、或は更に事實脱し得たとしても、それも尙ほ、此の時間の内なる出來事たる一

面を脱し得ない如く——我々は此の唯一の経験を脱し得ないのである。

しからばその唯一の経験とは何であるか。それは一面に於て我々に與へられたものとも云ひ得るであらう。しかし乍ら唯一の経験が與へられてゐると知る事は経験によつて知り得たのではない。我々は唯一なる経験を實は経験はしないのである。それは我々にただひとへに根源的に知られるのである。それは先天的なる直覺と呼んでよいであらう。しかしてカント哲學は實にかかる *eine Erfahrung* 或は *eine Natur* の根源的なる事實から出發するのである。それ自らは經驗的ならざる、しかもあらゆる經驗の根源たる事實から出發するのである。所謂範疇の演繹も歸する處「一つの經驗」の根源的事實の説明であり、その事實の可能の露出である。我々は一つの經驗を有つ。我々が進んで如何に經驗の内容を深めようと、それは一つの經驗の場所を出で得ないのである。一つの經驗とはあらゆる經驗成立の場所である。それは我々には未だ滿されざる場所ではあるけれど、無限に充實の可能を含み、又その保證を含む場所である。かくの如くに、一つの經驗の意味を見定め來つた私達は今や自ら、それが、以上に、内容によつて滿さるべき場所を含んだ形式の全體としての經驗一般と呼んだものと何等異なる事なき事を覺られたであらう。經驗一般は實に

唯一なる經驗として自己を具體化するものなのである。かくてここに單に部分的なる意味を有つのみ「對象一般」と全體としての「經驗一般」との相違も明かとなつた。尤も、かく言へばとて對象一般には自然一般に關はる意味がないと云ふのではない。純粹理性批判の第一版の演繹論に於ての如く對象一般は「我々によつてもはや直觀され得ず、従つて非經驗的なる對象即ち超越的對象 x と呼ばれ得るもの」であり A.S. 100. しかもそれは「我々の認識に於て常に一樣なるもの即ち x 」 Der reine Begriff von diesen transszendentalen Gegenstände, (der wirklich bei allen unseren Erkenntnissen immer eintheil = x ist). A. S. 100. として、正に超越的統覺に對應するものとして規定された。それ故我々が對象を認識すると云ふ事は、我々が根源的な自我にまで自覺する事であり、感覺的な自我の層から超越的なる自我の層にまで高まる事であつた。對象を知る事は自覺する事なのである。外を知る事は即ち内を自覺する事である。否、外を知る事が自覺の一面なのである。その意味に於て對象一般は超越的統覺の投影であり、内容である。超越的統覺の内容が超越的統覺の對象である。超越的統覺にとつては内容即ち對象である。さて超越的統覺は全經驗界の中心であるが故に、對象一般も當然全經驗界に關はる意味を有つであらう。その限りに於て對象一般は經驗一般

と範圍を等しくするであらう。しかしながらその際對象一般は單に同一なるxに止まらざるを得なかつた事はカントが我々に教へた如くである。單なる對象一般は未だ一定の context に於て具體化されてゐない。對象一般の具體化されたものが經驗一般なのである。けだし經驗一般に到つて、對象一般に結合し來つた直觀一般が眞に自己を實現し具體化し來るからである。實に時間としての直觀一般の内こそ、眞に經驗の生命があり脈動がある事は、先に述べた事からしても明かであるであらう。

我々は以上に於て、一般の意味を「物一般」「對象一般」「直觀一般」「經驗一般」の順に於てその具體化のあとを追ひ來つたのであつた。即ち物一般に於ける一般に於ては私達はそれが物自體、更に叡知的なるものと同一視され得た事から、それを單に叡知的なるもののもつ一般と見た。従つてそこに於ては經驗的なるものは總じて、純粹直觀すら除外されたのであつた。然るに「對象一般」に於て單に叡知的なるもの一般の外に「直觀一般」のもつ一般の意味が附加せられた。言はば單に叡知的なる一般が直觀的なる一般にまで自己を限定したのである。かくて單に叡知的なるものの無差

別なる一般は直觀一般の雜多をも含んで自己を純粹なる雜多へと具體化したのである。しかしながら對象一般に於ける直觀的なるものは尙ほ未だ單に純粹なるものに止まる。直觀的とは云へなほ純粹なるものに止まつて、感覺的なるものへの場所は明かには開かれてゐない。しかるに經驗一般に到つてはその箇々の内容については實現されてゐないにしても、經驗的なるものすべてへの場所が遂に準備されたのである。しかもそれは經驗的なるものの全體への場所であるが故に、單に經驗によつて獲られたものではない根源的なる要求の意味を有ち得たのである。

一般は、かくて第一に「叡知的なるもの」の領域、第二に「純粹なるもの」の領域の順をへて自己を具體化し、第三に「あらゆる經驗的なるもの」の領域にまで自己を具體化し來つたのである。しかしして叡知的なるものの領域は純粹なるものの領域及び經驗的なるものの領域を含まざるも、純粹なるものの領域に到つては叡知的なるものの領域の外に、一般に純粹なるものの意味に於て純粹に感性的なるものを含み、第三のあらゆる經驗的なるものの領域に於ては前二者、即ち叡知的なるもの、及び純粹なるものを含んで更に、經驗的なるものへの地盤をも開放してゐるのである。それは叡知的なるものの有つ單に抽象的な一般でなく直觀一般を媒介とする具體的なる一般

である。ここに到つて「一般」は眞に一般的なるものに達してゐる。しからば「意識一般」とは如何なる一般であらうか。(未完)